無頼なる日々に戻れず今さらにさよなら三角坂口安吾　佐々木寛子

青春挽歌のようである。坂口安吾的な無頼にあこがれ、愛読し実践していた若き日が過ぎ去ってしまったのだ。重くならず、軽く歌い流して、そこを特色としている。

じゃがいもの花咲く道を運ばれてやって来たのだ丸太のベンチ　坪内稔典

今月の八首は、すべて家具の歌。毎日いっしょに暮らしている家具の一つ一つにそれぞれの来歴と個性があることに、ふと光を当てている。じゃがいもが似合うベンチ。上句にさりげなくユーモアの味付けが。

そうだその名前だ君だ呼べば向くごとに一輪花咲くようだ　保刈明子

新しく飼うことになった四ヶ月の子犬をうたった作。やっと自分の名前をおぼえはじめたらしいことが、読者にもよく分かる。「そうだその名前だ君だ」が、うまい。わが家にもちょうど、三ヶ月の子犬がきたところで、下句の思いがよく分かる。

一歳児が蟻を見ており大地から四センチ程尻を浮かせて　田中章義

枕草子の「うつくしきもの」の段、「いと小さき塵のありけるを目ざとに見つける」幼子を思い出す。「四センチ程」がポイント。

木香薔薇なだれるように咲く家の庭にするりと子猫が消える　鈴木陽美

華やかでボリュームのある盛りの木香薔薇と子猫の対比。ちょっとミステリーめいた感じも楽しい。ただ、庭のある家と作者との関係が知りたくなる。通りがかりの家だろうか。自分の家ではなさそうだ。

鹿島槍の宙（そら）に浮かびて残雪と菜花の煌めき斜面を被う　尾上宏

第一・二句、背景となる真っ青な空がはからずも表現されている。空の青さに研ぎ出されたような鹿島槍をイメージしていいだろう。そう読むことによって、三句以下の斜面の描写が生きてくる。

秘密めく暗室にこもり仕事する写真部員に憧れいたりき　蔵田道子

高校時代の思い出らしい。昔のフィルム写真は暗室で現像、焼き付けをした。知らない者には、「秘密めく」感じがしたものである。高校生時代の「甘酸っぱい憧れ」が主題。

勇魚取り海なき街の網干の坂に網なし干す人もなし　加古陽

「網干坂」という地名をうたった歌。網干坂は、東京都文京区の小石川植物園の付近にある。思いつきと言えばそれまでだが、意味を希薄にして、遊び気分で「なし」を三つならべて、歌謡調の雰囲気を出している。

空欄を埋めゆくペンを見つめをり身に生じたること と思はず　原口嘉代子

医師が他の病院への紹介状を書いてくれているのを、すぐ傍で見ている場面、ということが前の二首で分かる。当然、不安、心配が心を占めているはずだが、冷静

短歌の現在

No.413　今月の16首を読む

佐佐木幸綱